

東北大学における 「アドミッションセンター」の現状と課題

東北大学高等教育開発推進センター高等教育開発部入試開発室
准教授 倉元直樹

1. はじめに

東北大学は全国の国立大学に先駆けて平成12（2000）年度からAO入試を導入した。AO入試等を担当する組織として平成11（1999）年4月にアドミッションセンターが設立された後、新たに発足した高等教育開発推進センターの一セクションに改組され、現在に至っている¹。この間の経緯は本誌上ですでに報告済み（倉元，2006）なので、本稿では、より具体的に現在の入試開発室における現状の活動と課題について、整理を試みる。

2. 高等教育開発推進センター評価報告書

表1は、平成20（2008）年3月に実施された高等教育開発推進センターの自己評価・外部評価の際、入試開発室及び入試センターに関わる業務・事務内容として提出したものである。評価は基本的に平成16（2004）年10月の高等教育開発推進センター発足後の活動を対象としたものだが、従前から継続している活動もある。開始及び終了年

度が明確な場合にはカッコ書きでその時期を記載した。一部に高等教育開発部²としての業務も含まれる。

以後、表1に掲げられた各項目の内容を適宜抜粋して記述する。

3. 高等教育開発部としての業務

設立の経緯、業務内容、日常の活動場所が異なるために寄合所帯という感覚が拭い切れない高等教育開発部にとって、合同で行う業務は組織の一体性を体現するには重要な機会である。三つの事務事業のうち、特に重要なのは「東北大学高等教育フォーラム」である。

東北大学高等教育フォーラムは、平成16（2004）年12月に第1回を実施して以来、平成20（2008）年11月まで毎年春秋に2回ずつ実施され、本稿執筆時点で9回の実績を重ねてきたシンポジウム形式のイベントである。第1回を例外として、秋に実施の奇数回のテーマは大学運営である。IDE東北支部主催のIDE大学セミナーを兼ねて開催している。第1回及び偶数回のテーマは、大学入試を含む高大接続関連

表1 東北大学高等教育開発推進センター高等教育開発部入試開発室の業務・事務

高等教育開発部業務	高等教育開発部事務事業
高等教育及び教育接続に関する研究開発	①東北大学高等教育フォーラムの開催 (H16～) ②学士課程教育プロセスから見た全学教育評価研究 (H19～) ③履修証明に関する研究 (H17～)
入試開発室業務	入試開発室事務事業
1. 東北大学の入試改善に関する研究	①東北大学の追跡調査に関わる研究及び実施(H16～) ②AO入試とオープンキャンパスに関する新入学生アンケート (H12～) ③成績調整方法の改善に関わる研究 (H18～) ④AO入試の実施方法改善に関わる研究 (H14～) ⑤補習教育に関わる高校の教育状況, 入試, 入試広報効果の研究 (H15～)
2. 入試全般及び教育環境に関わる研究	①AO入試の実施状況に関わる調査研究 (H12～) ②海外の入試制度, 教育制度の調査研究 ③国立大学における入試の多様化とアドミッションセンターの機能に関する研究 (H16～H18) ④大学入試の公平性に関わる研究 (H15～) ⑤大学入試学の構築に向けての基礎研究 (H15～)
3. 入試広報及び高大連携の企画・実施	①大学案内の企画・作成 ②オープンキャンパスの実情視察及び環境整備 ③高校教員対象の入試説明会 ④受験生対象の入試説明会 ⑤高校訪問・高大連携事業
4. AO入試・一般入試等の企画, コンサルテーション及び実施	①東北大学における入学者選抜方略の理論的整備 ②学部対象AO入試説明会の実施 (H18～) ③AO入試に関する学部別実施単位別聞き取り調査及び学部別コンサルテーション ④大学院入試実施体制の整備 ⑤センター試験, 一般入試及びAO入試の実施

のものである。表2に春のフォーラムのテーマ等を示す。この企画は高校現

表2 東北大学高等教育フォーラム一覧(高大接続関係分)

	実施日	タイトル	講演・現状報告	参加者数
第1回	H16.12.13	新時代の大学教育を考える -新教育課程における高校理科教育の現状-	基調講演者2名 (広島大, 東北大) 現状報告者3名	58名
第2回	H17.5.20	新時代の大学教育を考える(2) -高校での数学教育の現状と 東北大学の入試・教育の課題-	基調講演者2名 (東北大, 慶応大) 現状報告者3名	143名
第4回	H18.5.18	新時代の大学教育を考える(3) -高校英語教育の現状と東北 大学における英語教育-	基調講演者2名 (茨城大, 東北大) 現状報告者3名	124名
第6回	H19.5.17	理科実験の可能性を探る -高校・大学での実践例と東北 大学の挑戦-	基調講演者2名 (北大) 現状報告者3名	106名
第8回	H20.5.16	高校教育と大学入試:「AO入試」 の10年を振り返る -接続関係の再構築に向けて-	基調講演者2名 (東北大, 福井大) 現状報告者3名	177名
第10回 (計画中)	H21.5.15	高大連携活動と大学入試に関わ るテーマ	基調講演者2名 (新潟大, 長崎大) 現状報告者3名(予定)	-

場との意見交換という意味でも貴重な機会となっている。

4. 東北大学の入試改善に関する研究

東北大学の入学者選抜方法の設計, および, 改善に直接資するための研究活動は, 言わば入試開発室の根幹をなす活動であり, セクションの存在意義を示す重要な業務である。

4.1 追跡調査

全学レベルの追跡調査は東北大学の中期目標・中期計画との関連で年度計画に書き込まれてアドミッションセンターに割り振られた。その業務を入試開発室が引き継いだ。

追跡調査は手間の割に方法論的に大きな困難を抱え, 結果の解釈も制約される(倉元・奥野, 2006)。特別な知恵はないが, 大学入試センター研究開発部の協力ⁱⁱⁱ⁾の下, 分析を継続している。AO入試で入学した学生の成績が

おおむね良好であることは確認されている。

4.2 AO入試とオープンキャンパスに関する新入学生アンケート

東北大学のAO入試開始初年度から継続的に実施している。東北大学では入試を教育の一環として位置づけ、当初から「学力重視のAO入試」を貫いているが、その成果を検証するに当たって、貴重な資料として機能している(例えば、西郡他、2007)。

4.3 その他

東北大学は個別試験の理科で得点調整を行っていることを選抜要項で公表している。入試関連の委員会で見直し提言され、検討を行った。その結果、調整方法に大きな問題はなく選抜の公平性に寄与していることが確認されたが、新たな問題点も見出された(倉元・西郡・木村他、2008)。研究業務は実質的に平成19(2007)年度をもって終了したが、成果は毎年の作題委員会において還元されている。

このように、その時点における様々な課題に応じた実証研究を行い、研究成果に基づいて当面の問題解決策や方向性を示すことが入試開発室の大切な使命となっている。入試広報から入学後の教育まで、幅広い研究テーマが現われてくる。

5. 入試全般及び教育環境に関わる研究

前述の東北大学の入試改善に直接資する研究の基盤となるのが、わが国の大学入試全般に関わる研究である。「AO入試の実施状況に関わる調査」の実施は平成19(2007)年度入試を対象とした調査で終了したが、AO入試全般の動向をとらえたという意味で、すべての大学にとって意味があると考えたい。海外の大学入学者選抜制度に関する動向調査等も同様の役割を担っている。

5.1 大学入試の公平性に関わる研究

個人的には、大学入試が公平であるべきという大原則が、近年、ないがしろにされていると感じることが多い。重箱の隅をつつつくような議論は問題外だとしても、大学入試の制度や方法が「公平」と認識されない限り、モラルハザードを招くことが懸念される。これまで、社会心理学的公正研究の諸理論を援用することで、大学入試の公平性という問題について従来から論じられてきた教育機会均等論等とも異なる新たな論点を切り開いたことがこれまでの成果である(西郡・倉元、2007)。個別大学において具体的な大学入試実施方針の策定で参考になる点に大きな特徴がある。

5.2 大学入試学の構築に向けての基礎研究

教育の一環である東北大学の入試を支える研究センターとして、入試開発室にとっては極めて大きな課題と言える。この問題に関しては、後に改めて論じることとしたい。

6. 入試広報及び高大連携の企画・実施

広報、高大連携、入試の企画・実施といった業務は、入試開発室よりも入試センターの業務という色彩が濃い。入試課を中心とした事務部門との連携、学内の入試関連委員会との関係により重要となる。実質的な実務としては、入試広報・高大連携に関わる業務が量的、時間的に大きな部分を占めている。以下、概略について簡単に述べる。

6.1 大学案内の企画・作成

東北大学案内は受験生が東北大学に最初に触れる冊子媒体として重要である。大学の概要、研究教育活動内容、周辺環境等、高校生や受験生が関心を持つ情報について満遍なく分かりやすく示すため、毎年、7月末に2日間実施されるオープンキャンパスに向け、新しいコンセプトとデザインで作成している。

6.2 オープンキャンパスの実情視察及び環境整備

オープンキャンパスは東北大学の高大連携活動の中核をなす極めて重要なイベントである。受験生に対して東北大学の魅力を伝えるのみならず、高校生の学習意欲を喚起するために欠くことができない。年々参加者が増え、規模が拡大してきた。平成19(2007)年度には延べ36,000名以上の参加者が集まり、その規模で全国第5位にランクされた(朝日新聞出版、2008)。参加者数は今でも拡大傾向にあり、平成20(2008)年度には41,000名を突破した。

オープンキャンパスの実施内容は各部署の裁量に任されており、入試センターはその下支えをする役割である。案内資料の作成は入試課の役割である。加えて、仙台市内に点在する4つのキャンパスの状況把握が重要である。規模が拡大するにつれて、交通手段、救護等に関する体制整備が難しくなっている。部局任せにはできないので、全学体制でのマネジメントが必要となる。実務は入試課を中心とした事務方が担うが、現場に向いて問題点を拾い上げてフィードバックし、可能な限り鳥瞰的な情報把握をして次年度の準備につなげていくことが入試開発室教員の役割となっている。

6.3 入試説明会

東北大学主催の入試説明会には二つの活動がある。一つは進路指導担当教員向けのもので、アドミッションセンター設立当初から継続している。東北地方を中心に毎年15、6ヵ所で実施している。もう一つは受験生を対象としたもので、平成18（2006）年度に開始した。これまで、東京と大阪^{iv}で実施してきた。基本的に高校訪問による広報効果を期待しにくい地域の広報活動である。近年では民間業者主催のものは厳選し、本来的に必要と判断されるもののみ限定して参加している。

6.4 高校訪問・高大連携事業

高校訪問は広報のために数をこなすというより、高校との緊密な情報交換のネットワーク作りの意味合いが強い。1回の訪問につき、最低1コマ分は時間を割いていただき、情報交換をするというのが基本スタイルである。相互に信頼関係が構築されれば、希望生徒向けの大学説明会、入試説明会を開催することも多い。参加者1～2名の個別相談から100名単位の説明会まで、規模とスタイルは高校の事情に応じて様々である。

平成19（2007）年度から開始した事業に「東北大学高等教育開発推進センターアウトリーチプログラム」がある。高校生の進学意欲、学習意欲の向上を

目的とした出前授業の一種だが、校外に大ホールを借りて一斉にセンター試験リスニング体験をするのが企画の目玉となっている。初年度は岩手県で約700名（東北大学高等教育開発推進センター、2008）、2回目となる平成20（2008）年度には青森県で1,200名を集めて実施された。

7. AO入試・一般入試等の企画、コンサルテーション及び実施

一般的にAO入試に対して逆風が吹いている昨今だが、当初から「学力重視」を謳ってきた「東北大学型AO入試」は順調に定着してきた。平成21（2009）年度入試からは文学部が加わり、これで全学部が揃うこととなった。すでに合格者全員の入学手続きが完了したII期^vでは、各学部とも過去最高の志願者数かそれに迫るなど、順調に推移している。一般入試では、ご多分にもれず志願倍率が思うように上がらない募集単位もあるが、当面、大きな問題は生じていない。

東北大学の入試では、入試区分を問わず、学部の主体性を重んじる雰囲気が強い。入試開発室として力を入れてきたのは学部をバックアップするコンサルテーション機能である。主としてAO入試の企画を中心に各学部の個別相談に応じてきた。それに加えて、AO入試がおおむね成功しているという

認識を背景に、平成18（2006）年度から年1回、全学部を対象とした「AO入試懇談会」を開催している。一貫した東北大学の入試スタイルの確立に向けて、独立性の強い各部署の足並みを整えるためには貴重な情報交換の場となっている。

8. まとめに代えて

以上、東北大学の入試開発室の現状の活動について述べてきた。当然のことながら、大学として個別の課題を抱えているのは事実だが、独自には解決し難い問題、他大学にも共通の問題が

あるのも事実である。ここでは、5.2節で触れかけて残しておいた「大学入試学」の構築という課題に言及してまとめとしたい。

前回の報告（倉元、2006）で、教育の一環として大学入試をとらえたとき、中長期的展望で大学入試制度、大学入試方法を設計するためには「大学入試学（Admission Studies）」の構築が必要ではないかとの私見を述べた。そして、個別大学の立場で行われる入試研究には日本全国を見渡した広い視野から行われる大学入試センター研究開発部の研究が支えとなる必要がある

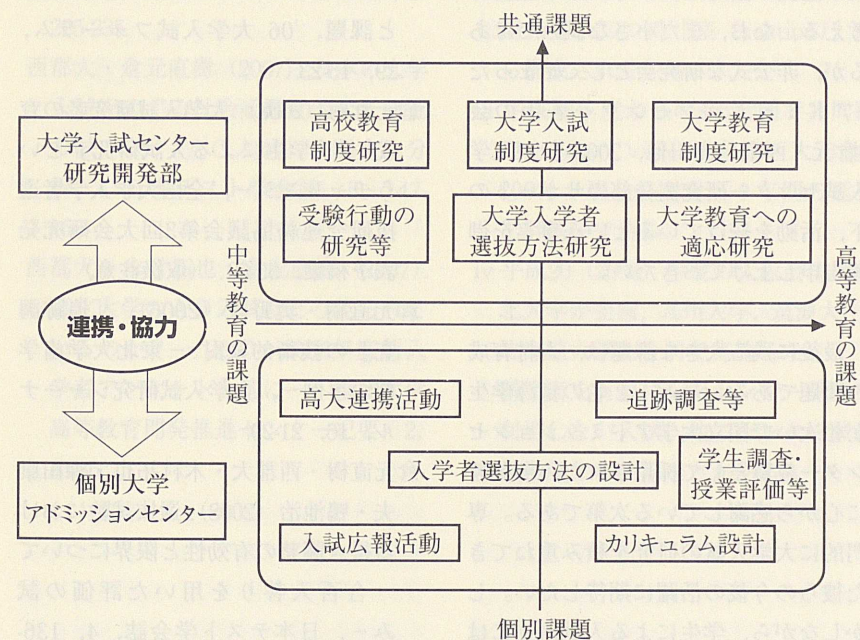


図 大学入試における研究課題、実践課題の概念図

と説いた。図は、大学入試センター研究開発部の研究課題と個別大学のアドミッションセンターの実践課題とを思いつくままに並べたものである。縦軸は「課題の共通性」、横軸は高大接続という大学入試の教育的使命から見た「時間軸」を表現したつもりである。一つひとつの課題には軽重があり、入試の基盤を支える基礎研究等、本稿の図では表現し尽くしていないテーマもあるかと思う。単なる叩き台ととらえていただければ幸いである。いずれにせよ、大学入試センターが中軸となって、各大学のアドミッションセンターが連携・協力していくことが重要と考える。なお、まだ小さな試みではあるが、非公式な研究会として始まった「アドミッションセンター若手の会（倉元・西郡・島田他，2008）」が大学入試センター研究開発部のサポートの下、活動を続けているという事実を御報告申し上げておきたい。

最後に残る大きな課題は、人材育成の問題である。最近、2名の指導学生が相次いで国立大学アドミッションセンター教員として採用された。御英断に心から感謝している次第である。専門的に大学入試の研究を積み重ねてきた彼らの今後の活躍に期待したい。しかしながら、学生による入試研究には大きな困難が伴う（倉元，2008）。さ

らに、入試開発室自体には研究者養成機能はなく、計画的な人材育成の目処は未だ立っていない。是非とも関係者の御理解を賜り、わが国の教育の根幹を実質的に支える大学入試に長期的な展望が開かれるためにも、計画的な入試研究者育成供給システムの構築をお願いしたい。

文献

朝日新聞出版（2008）. 大学ランキング 2009.
 倉元直樹（2006）. 東北大学における「アドミッションセンター」の取組と課題，'06 大学入試フォーラム，29，15-23.
 倉元直樹（2008）. 大学入試研究者の育成 - 「学生による入試研究」というチャレンジ，全国大学入学者選抜研究連絡協議会第3回大会研究発表予稿集，55-60.（取扱注意）.
 倉元直樹・奥野攻（2006）. 「追跡調査」の技術的検討 - 東北大学歯学部部の事例 -，大学入試研究ジャーナル，16，21-29.
 倉元直樹・西郡大・木村拓也・森田康夫・鴨池治（2008）. 選抜試験における得点調整の有効性と限界について - 合否入替りを用いた評価の試み -，日本テスト学会誌，4，136-152.

倉元直樹・西郡大・島田康行・木村拓也・デメジャン アドレット・中畝菜穂子・吉村宰・大谷奨・大久保貢・福島真司（2008）. 「追跡調査に関わる量的・質的研究」研究会 - 平成18年度アドミッションセンター若手の会 - 発表要旨集，東北大学高等教育開発推進センター紀要，3，335-348.
 倉元直樹・大津起夫・鈴木規夫・橋本貴充（2008）. 東北大学追跡調査研究（2） - 平成17，18年度入学者の全学的分析および追跡調査データフォーマット整備計画 -，東北大学高等教育開発推進センター紀要，3，225-235.
 西郡大・倉元直樹（2007）. 日本の大学入試をめぐる社会心理学的公正研究の試み - 「AO入試」に関する分析 -，日本テスト学会誌，3，147-160.
 西郡大・木村拓也・倉元直樹（2007）. 東北大学のAO入試はどう見られているのか？ - 2000～2006年度新入学者アンケートを基に -，東北大学高等教育開発推進センター紀要，2，23-36.

東北大学高等教育開発推進センター（2008）. 東北大学高等教育開発推進センターアウトリーチプログラム（1）：テストって何だろう？，実施報告書.
 i 教員が所属する高等教育開発部入試開発室，および，業務組織としての入試センターとなった。
 ii 高等教育開発部は「入口から出口まで」の学生支援を担当する高等教育開発推進センターに設置されている。主として入学後の全学教育やFD等を担当する高等教育開発室と入試を含む入学までを担当する入試開発室の二つの「室（section）」から構成されている。
 iii 平成18年度からの3年計画で共同研究を行っている（倉元・大津他，2008）。現在，さらに3年間の延長を計画中である。
 iv 平成20（2008）年度の大坂会場は東北大学が企画，九州大学，筑波大学，北海道大学と合同で実施した。
 v 新卒者を対象にしたセンター試験を利用しない入試。他にセンター試験を利用するIII期などがある。